

食育文化都市にふさわしい 郷土を愛する心を培う

おばま 小浜市長(福井県) **まつざき こうじ** 松崎晃治



みけつくに 御食国若狭小浜

小浜市は、大規模リアス海岸「若狭湾」に面しており、その恩恵を受けて発展してきました。古代より豊富な海産物や塩を都へ送り、朝廷の食文化を支えた「御食国」であり、小浜と京都をつなぐ街道群は、「鯖街道」として現在も親しまれています。小浜で多く獲れた鯖は、一塩して京都へと運ばれ、京都の鯖ずしになったりしています。京都とつながる街道群が「鯖街道」と呼ばれるゆえんです。平成27年「海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群」御食国若狭と鯖街道」は日本遺産第1号に認定されました。



夜の文殊地藏堂周辺(小浜西組)

このような都との関係を背景に、市内各地には多くの神社仏閣と600を超える民俗行事が残っています。これらからは、自然を敬い感謝して生きる心や「いただきます」に象徴される「和食の精神」を感じることができます。このような、誇れる食の歴史と現在も受け継がれている豊かな食や食文化に着目し、本市は平成12年に「食のまちづくり」を開始しました。それ以来、食育文化都市としてさまざまな取り組みを進めています。

「思い出の鯖」復活

私は、小浜漁港のすぐそばの商店街で生まれ育ちました。市場もすぐそばにあり、子どもの頃から、季節ごとに獲れる豊富な海産物を食べて育ちました。特に鯖については、本当にたくさん水揚げがあり、安く手に入ったらしく、焼いた鯖はもちろんです。大根と鯖の切り身を一緒に煮て船場汁にしたり、しょうゆにつけて干物にしてしょうゆ干しにしたり、煮つけにしたり、鯖の卵を煮た鯖子があったり、また、加工品としては、鯖をぬか漬けにして「へしこ」にしたり、「へしこ」を塩抜きしてさらに麴に漬けて「なれずし」にしたり、鯖の缶詰があったりと、鯖のさまざまな料理がよく食卓に上り、本当においしいと思って当たり前のように食べていました。また、漁港の辺りで釣りをしていると漁連のおじさん



小浜よっぱらいサバの餌やり風景

が、鯖を何匹かくれることもありました。私にとって、鯖は思い出の食べ物です。

小浜の鯖がいかにおいしかったか、北大路魯山人は著書の中で「鯖は若狭が第一」「とても下魚とは思えないまでに上品な小味をもち、一度口にしたら忘れがたい風味をもつ美肴である」「鯖を語らんとする者は、ともかくも若狭春秋の鯖の味を知らねば、鯖を論じるわけにはいかない」と絶賛し、鯖を求めて小浜へ来ています。

ところが、近年本市では、以前のように鯖が獲れなくなっていました。

そんな中で、「御食国若狭と鯖街道」が日本遺産に認定されました。「鯖街道」が注目



小浜よっぱらいサバのお刺身

されるようになり、鯖街道の起点の小浜に行っておいしい鯖を食べたいという声が上がってくるようになりました。私も昔のように小浜の新鮮な鯖を食べたいと思っていました。

そこで、鯖の養殖をする「鯖復活プロジェクト」を始めました。本市には、福井県立大学の海洋生物資源学部があります。大学の先生の力もお借りしながら、鯖養殖がスタートしました。

「鯖復活プロジェクト」は取りあえず成功し、現在は「小浜よっぱらいサバ」というブランド名で売り出しています。餌に酒粕さけかすを混ぜて育てることを考案し、それによって鯖特有の臭みがなくなり、深いうま味が出ました。餌に酒粕を混ぜることから、「小浜よっぱらいサバ」です。「小浜よっぱらいサバ」は、アニサキスがほとんどいないので、刺し身で食べられます。鯖街道の歴史と鯖への愛着から生まれた「小浜よっぱらいサバ」は、小浜の特産になりつつあります。

郷土を愛する心を培う

私は、市長になる前は県議会議員をしていましたが、その前は教員をしていました。小学校で6年間、中学校で1年間クラス担任をし、県教委にも4年間勤務しまし

た。その経験を生かして、市長になってからも教育委員会と相談の上、小学校や中学校で出前授業をさせてもらっています。子どもたちに故郷の良さを知ってもらいたいと始めた授業でしたが、平成22年度からは、教育委員会の「ふるさと小浜MIRA I事業」として予算化もされ、ふるさと教育の中核に位置付けられました。

毎年4月に各学校輪番で、私が小浜市のいろいろなところや課題、市の活性化策などをテーマに出前授業をし、子どもたちに問題意識を持つてもらいます。その上で、授業の最後に、私から「地域の活性化策」について考えてほしいというお願いとしての「宿題」を出します。子どもたちは、約1年かけて体験活動などを通して地域の宝を改めて認識したり、地域の抱えている課題を知ったりして、地域の宝の活用策や地域課題の解決策を考え合っ



小学校での出前授業を行う筆者(真ん中)

て、年度末には自分たちの考えたことを、私や地域の方々に発表し、提言するという探究的なふるさと学習になっています。これまで、子どもたちの提言から、世代を超えた交流・憩いの場としてのカフェができたたり、「サバまん」という特産品ができた

りしています。子どもたちは発表までの過程で地元の地場産業である塗り箸工場へ取材に行ったり、修学旅行で地元をPRする体験をしたり、地元のレストラン事業者や農業者と協力したりとさまざまなかことをしながら「地域の活性化策」について探求し、その中でふるさとへの愛着を持ち、ふるさとを誇りに思う心が培われていると感じています。

教育委員会は、本年度から「ふるさと小浜MIRA I事業」をさらに進化させた新規事業とし「小浜の未来を担う総合教育事業」を立ち上げています。まだ、私の授業は続きそうです。